Death note Newcentury

福ノ神

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２０年前に無惨にも起こってしまった大量殺人事件。その事件の原因・・・ それは「デスノート」・・・ 東京警察署本部はそのような事件に対抗すべく「デスノート対策本部」を設置した・・・ そしてデスノートに関する情報を入手しつつもデスノートによる被害を最小限にするため日々捜査をしている。

目次

Death note Newcent ury ―― 1
第二章 ―― 6
第三章 ―― 12
第四章 ―― 17
第五章 ―― 24
第六章 ―― 32
第七章 ―― 38
第八章 ―― 44

Death note Newcentury

序章

「いい天気だねぇ」
とあるビルの屋上で、夏には合わないフードパーカーを着た女性が立っている。
「ねぇ… ベポ… 楽しいことしようよ」
片手に黒いノートをもったままその女はいい放つ。
「殺り方は知ってる… ふふっ… ハハハ!!」
女はそう言ったきり、そのまま姿を消した。

第一章［二十年前の再現］

東京警察署本部
その中にある日本でただひとつの組織であるデスノート対策本部… ここにはデスノートに関する情報のごく一部が記録されている。
その情報… デスノートのルールを紹介しておこう。

これは、今の我々の持つデスノートに関するすべての情報である。
・このノートに名前をかかれた人間は死ぬ
・書く人の顔や名前が頭に入ってないと効果はない
・名前のあとの４０秒以内に死因をかくと、その通りになる
・死因を書かなければすべてが心臓麻痺とされる
以上が我々のもつ情報である。この情報は２０年前におきた「デスノート大量殺人事件」によって明らかとなったものであり、この事件以来このデスノート対策本部のものは皆偽名を使うことなっている。
ちなみにだが、デスノート対策本部には8人の仲間がいる。私はその8人の中の一人赤城　関（あかぎ　せき）[偽名]である。
私達はこの２０年近くデスノートに関する情報をあまり手にすることができていない。どうにかしてこの状況を打破せねば・・・
夏の始め、デスノート対策本部では今日も平和な日々が続いている。
「殺人は5ヶ月くらいに一度や二度くらいにはありますけど、どれもデスノートとは無関係とは・・・ どうしますか?・・・ 赤城さん」
私の同期の女性警察員久慈　南（くじ　みなみ）[偽名]がノートパソコンを見ながらため息まじりに言う。

私は手に持ったコーヒーの入ったカップを持ち、窓の外を見ていた。８月の空はとても清々しく落ち着けるが、デスノートに関する情報は空からは降ってはこない。

警察署内にある殺人などの記録書を見ていた余市　登（よいち　のぼる）[偽名]が南の発言にしびれを切らしたらしく書類から目を離し背伸びをする。

「ここのところ殺人もなければ何の動きもありませんし…　どうしたものですかね、日本は」

南はコーヒーを一口飲むと書類をつかみかかげてみせる

「このまま何の情報も入らなかったら私たち解散ですよ」

南のかかげたその書類には解散通知と書かれている。

「残された期限はまだあと2ヶ月はあるんだし大丈夫ですよ、南さん」

テレビを見て休憩をとっていた白老　七飯（しらおい　ななえ）[偽名]が南に言う。

「またそんなのんきな事言って、あんたも仕事しなさいよね！何時間休憩とれば気がすむのよ!!」

南は怒り七飯にチョップをかます。

すると殺人記録の書かれた書類のファイルを棚に戻そうとした登が口を開く。

「２０年前の事件でデスノートが犯人と一緒に燃えなければ…　今頃いろんな事が明らかになって、沢山の情報が入ってたはずなんですけどね」

その通りである。２０年前の事件で犯人がビルに立てこもりそのまま自分の体に火をつけデスノートごと燃えなければ・・・ もっと有力な情報が手にはいったはずなのである。しかし、今となってはもう後の祭り。今はデスノートを所持している者を待つことしかできないのである。

「町を捜索している二人も何の手がかりも持ってこないし、他二人は有給休暇とって海外に逃亡するし・・・ これじゃ「警察署のはみ出し部署」呼ばわりされてもおかしくないですよ・・・」

登は七飯の見ているテレビに目を移した。そのテレビではｌｉｖｅで町の名産物を紹介する特番が流れていた。

「ちょうどここ付近が流れていますよ南さん」

七飯が南の方を見る。

「そうね。へー街角にこんな店があったのね。知らなかったわ。今度みんなでいきましょうよ」

店の話しに花がさいたその時、登がテレビ画面のゲストの後ろを指差した。

「なんかこの人おかしくないですか?さっきからふらふらして・・・ っ!!」

登が指差した人物は少しふらついた後急に倒れたのである。

「今・・・ 倒れましたよね?どういう・・・ 事なんでしょう?」

すると、警察署専用の通信ファイルに1通のメールが入った。そこには「僕はキラだ… 君達に僕は止められない… ２０年前の恐怖をもう一度再現してやる」と書かれていた。このメッセージを見ていた私はすぐにテレビに目を移す。テレビに映っていたゲストやキャスター、通行人が次々と倒れていく。楽しい娯楽の番組は一瞬のうちにして地獄絵図と化した。

私はメールを読み返す。

「間違いない… こいつは… デスノートを所持している」

そのメールをみた登はすぐに私の方を見ると、震えた声で話しかける

「２０年前の恐怖をもう一度再現してやるって… これ本当にヤバい奴じゃないですか……」

２０年前の大量殺人を… 再現してやる… だと… ?そんなことをしたら… また沢山の被害者が…

そう思った瞬間机の上においてあった携帯から着信音が鳴り響いた…

第二章

第二章［仮面の人物］

私は着信音の鳴るケータイをつかみ通話ボタンを押した。

幸い、出てきたのは町を捜索していた私の同期の警察官京極　東嶋（きょうごく　しま）［偽名］であった。

京極は荒い息でとても安定している状態ではなかった。

「赤城!!大変だぞ!!ここら一帯で大量に人が倒れてる!…　これじゃ…　２０年前と同じだぞ!!クソッ!!…　どうしてこんな昼間に…」

私はケータイのスピーカーをオンにし、ケータイに向かって話しかけた。

「京極…　お前は今どこにいる?」

私はできるだけ落ち着いた調子で話す。

ー今は京極を落ち着かせ、できるだけこの状況に対処できる状態にしないとー

…　すると京極は冷静をとり戻したらしく、

「ここは…　東京国道5号線の交差点付近だ。近くには…　横浜線の駅がある…」と落ち着いた調子で言う。

京極がそう言った後、七飯がパソコンで位置を確認する。
「…　5号線はここから約5㎞です!!…　どうしますか、赤城さん…」
私はすこし思考をめぐらせた後、
「京極…　GPSをオンにしろ。できるだけ周りを見渡してデスノートらしきものをもってる奴をつけるんだ…　いいか…　くれぐれも…　死ぬなよ」
それを聞いた京極は少し間をあけ、
「…　分かった。最善は尽くす…　赤城、お前も早く来いよ。」と答えた。
京極は電話を切り、行動に移った。
赤城は電話を切ると、登の方を向く。
「登!!お前はここに残って京極の位置と他の部署のやつらに至急東京国道5号線交差点付近に来るよう伝えてくれ!!!」
「了解!!」
町には京極の他に米沢　呉（よねざわ　くれ）[偽名]という新米の捜査官がいる。
私は米沢に京極のGPSをたどるよう連絡を入れ、七飯、南と共に車に乗り警察署をあとにした。
警察署を出て約一分たった時、警察署に残っている登から連絡が入る。
「京極さんのGPSがオンになりました!!少しずつ移動しています!!」

「犯人を見つけたのか…　よし…　急ぐぞ!!!」
私は車のアクセルを強く踏む。車のタイヤからキュルキュル!!という音が響く。
ー…　間に合ってくれ。…　京極が死んでしまっては…　もとも子もない…　ー

それから約１５分後…
ようやく京極のＧＰＳの居場所に着くことができた。すると、またもや登から、「赤城さん!!もうすぐ米沢さんと応援に頼んだ他の部署の方たちがそちらにつきます!!!」という通信が入った。
私達は一旦別れ京極を探すことにした。
私は周りを見渡す。
ーダメだ…　周りにいる人が次々と倒れいくだけで…　誰が京極か分からない…　もしこの死人の中に京極がいたら?ー
私はとてつもない不安と緊張を宿らせていた…
もし京極が死んでいたら?もしこのまま私がデスノートの餌食となったら?
私はどうすることもできずただ呆然とその場にたっていた。
ーこのままではだめだ一旦ここを離れて状況を…　ー
そう思った時だった。

「赤城さん!!京極さんです!!見つけました!!」
私の後ろにいた七飯が指を差し叫ぶ。
私は指の差す方をみた。
約１００ｍ先に京極の姿があったのである。
京極の目線の先には1人のフードパーカーを着た人物がいた。
「‥あいつが‥デスノートを‥‥」
私は京極のもとへと走る‥
約２０ｍくらい走った時‥‥あることに気がつく‥‥
京極の後ろに‥‥人影が見えたのだ‥
ー‥‥誰なんだ?あいつは?ー
顔を確認しようとするが仮面をしていて誰だかわからない。
‥‥すると、仮面をした人物は胸ポケットから何かを取り出した。
「あれは‥‥まさか!!」
そのまさかだった。その人物は案の定銃らしきものを右手に持っていた。
ー‥‥このままでは‥‥京極が殺される!!ー
走る足を京極から仮面の人物へと切り替える。
‥‥だめだ‥追い付かない‥

「京極!!!!!!後ろ!!!!!!」
私は叫んだ。力の限り・・・・
私の声を聞き京極が後ろを振り替える・・・
しかし・・・

パァァァン!!!

仮面の人物は何のためらいもなく引き金を引いた・・・
鋭くはじけたかのような高い銃声が響く。
「やりやがった・・・・」
私は目を見開き京極を見た。
・・・しかし、倒れたのは京極ではなく、その後ろにいた・・・・犯人であった。
「グルじゃ・・・・ないのか?」
私は混乱した・・・何が起こっているのだ・・・・・犯人とあいつがグルじゃないならあいつは一体・・・・
仮面の人物は倒れた犯人に近づく・・・
京極はその場に立ち尽くしている。

仮面をしたその人物は犯人をくまなく見ると、私の方を向いた・・・・

「赤城・・・　久しぶりだな・・・・」

そいつは仮面をおもむろに外す。

その仮面の下に隠れていたのは、約1年前に海外に出ていったきりそのまま滞在期間も伝えずにいなくなった・・・　茅ヶ崎　神島（ちがさき　しま）［偽名］

であった。

第三章

第三章［死神ベポ　Ｐａｒｔ１］

「…　やっぱり…　お前が殺したんだろ…　茅ヶ崎…」

大量殺人事件の起こった五時間後…　私と茅ヶ崎は事情聴取のためと急遽設置されたデスノート保管室に呼ばれたのである。何故ならば、

そう…　犯人は死んでいたのだ。

「違うって言ってんだろ!!?俺が撃ったのは麻酔銃で本物の銃なんかじゃねぇんだよ!!!…　あいつはノートに自分の名前を書いて勝手に自殺したんだ！そうじゃなきゃ他に何があるんだよ!?」

茅ヶ崎の苛立ちが声に現れる。

…　だがまあそれも仕方のないことなのかもしれない。

事件の後…　我々が本部に帰るやいなやすぐに身体検査が行われ身体中くまなく調

べさせられたのである。
あげくのはてには犯人が死んでいるということで警視監のお偉いさんが我々を呼び、
「犯人が死んでいるということは今後この事件は現場で動いていた君らが一番の重要参考人として考えられる事となった…　君らの中で最も犯人に近づいたとされる者は至急デスノート保管室に来てもらおう」
と言われ、早く飯が食いたいのを我慢し、長い廊下をこうして二人で歩いているのである。
話を戻そう…
そう、茅ヶ崎が撃ったのは確かに麻酔銃であった。
「だかなぁ茅ヶ崎…　鑑識にデスノートをまわしてみたが…　ノートに犯人の名前は載ってなかったんだよ…」
私はそう言った。
この時の私の頭はそろそろピークを迎えていたようだった。
なぜなら、
ー麻酔銃でも当りどころが悪ければ死ぬというケースもあるんじゃないか?ー
というおかしな考えが頭をよぎったからである。
…　麻酔銃で人が死ぬ?…　冗談じゃない。それなら元々「麻酔」なんて名前につけ

ないだろう。
ーきっと疲れているんだー
私は頭を左右にふり一旦頭の中をリセットさせた。
すると、茅ヶ崎のケータイに一通のメールが届いた。
茅ヶ崎は着信音の鳴るケータイをポケットからとりだし、届いたメールを読んだ。
「・・・・ やっぱりな」
茅ヶ崎はメールの書かれたケータイを私の前に突き付けた。
「これを見ろ・・・・ 赤城・・」
そこには「遺体は心臓麻痺によって死亡した可能性が高い」
と書かれてあった。
メールを読み終えたのを確認した茅ヶ崎は差出人に返信のメールを書きながら私に話し出した。
「俺は事件の後、犯人が死んでいると聞いてもしかしたらと思い、そのまますぐに近くの大学の医学部に遺体を搬送するよう指示した・・・・ そして、「至急司法解剖するように」と頼みその結果が今かえってきたところだ。・・・・ 案の定・・・ 結果は予想通りだった」
つまりだ、このメールに書かれた事が、もし本当なら・・・・・
犯人は・・・

デスノートの持つ力によって死んだ

…　と考えられる。

「だが…　それならなぜ犯人の名前がノートに載っていない？」

そう…　ノートに犯人の名前は書かれていなかった。

…　だとすると、それが一体どういう意味を持つのか…　私には分からなかった。

「要するにだ…　犯人は自分の名前を前もって書き、それを破ってどこかに隠した…か、あるいは、デスノートが他にも何冊かあり、他のデスノートを持っているやつが犯人の名前を書いて犯人を殺した…　まあ現状で考えられるのは、このどっちかだろうな…」

それを聞いた瞬間、とてつもない不安が私を襲った。

「ま…　まて茅ヶ崎…　デスノートが他にもある…　って…　そんなことがあるのか？」

私は戸惑いながら聞く…

茅ヶ崎はいたって普通に、かつ冷淡に答えた。

「だから…　それを確かめに今こうして保管室に行ってんだろうがよ…」

私はこの言葉の裏に隠された意味を理解することはできなかった。
デスノートを我々が手にした今、どれだけ多くの情報を手にいれるかで今後の対策方針も変わってくる…
私には不安と期待の感情が混ざりつつも心のどこかで「なんとかなるだろう」という思いがあった。

この時はまだ、
デスノートの持つ力の大きさと、その力が我々にどれほどの影響を与え、苦しめるのか…　そして死の持つ最大の恐怖がいかなるものなのかを…　私は知るよしもなかった。

第四章

第四章［死神ペポ　Ｐａｒｔ２］

長い・・・・　長い廊下を歩き・・・

ようやくのことでデスノート保管室まで来ることができた。

身体検査室がデスノート保管室から遠かったのもあるが、疲労もたまっており・・・　とても良い状態とは言い難かった。

保管室の前には二人の警察官がたっており、私と茅ヶ崎は警察手帳を二人に見せ中へと入った・・・

保管室の中には、私達の間では警察署のトップとも言われている

東京警察署本部犯罪事件取り締まり課の署長・・・　和山　桂（わざん　かつら）［本名］がいた。

「ようやく来たのかね…　茅ヶ崎君…　それと…　赤城君…」
　和山署長は私達二人を見るなり深いため息をつき、言い放った。
「君達は殺人の現場にいて、犯人に一番に近づいた重要参考人だ…
　この事件についてできるだけ深く調べさせてもらうよ…」
　和山署長はそう言うと、デスノートの置かれた机の前に移動した。

「…　赤城君…　これが例のデスノートとやつかね…　？」
　私はゆっくりとうなずいてみせる。
「こんなノート一冊で…　今回のような大量殺人をなすことができるとは…　全く…
けしからん話だ…」
　和山署長は落胆の表情でそう言うと、
　素手でデスノートを取ろうとした…
　すると…

「本当に素手で触るんですか？」
　と、私の隣に立っていた茅ヶ崎が鋭く突くように言った…
　和山署長はデスノートを取ろうとする手を下ろし、

「…　何か私の行動に悪い点でもあるのかね…　茅ヶ崎君…　？」

と聞き返した。

すると、茅ヶ崎は私の隣からデスノートの置かれた机まで…　一歩一歩…　ゆっくりと歩き始めた。

「俺はこの一年間…　海外でデスノートについて調べてきました。…　その結果、いろいろとデスノートに関する情報を手に入れる事ができました…

聞きたいですか？…　和山署長…」

茅ヶ崎は淡々とした声で和山署長に問いかけた。

和山署長は「聞かせてもらおうか…　その情報とやらを」と、軽く軽率した声色で言った。

茅ヶ崎はなおも冷酷な態度で答える…

「まず…　このデスノートには一体の死神がついています。そして…　我々人間がそのノートに触れることで…　その死神を肉眼でみることができるようになります。…　また、所有権を持つ者のいないデスノートに最初に素手で触った者は、ノートの所有権を有することとなります…　そして、このノートの所有権を持っていた今回の事件の犯人は…　もう死んでいる…　これがどういう事か…　分かるか赤城…」

茅ヶ崎は私の方を向いて問いかけた。
私は思考をめぐらせたのち、ゆっくりと口を開いた…
「…　つまり…　このデスノートの所有権は、次に素手でこのノートに触った者に移る…　ということか…　？」
茅ヶ崎は少しにやけた顔で和山署長を見る…
「その通りだ赤城…　さて、どうしますか署長？…　このまま誰かがこのノートに触らなければ、デスノートに関する情報を死神から聞き出すことは出来ない…　しかし一旦このデスノートを署長が触ったとする。そしたら和山署長…　あなたが死ぬまで、このノートの所有者である死神が署長につくことになります。…　署長にはデスノートの所有権を有する覚悟はありますか？」
和山署長の顔は、先ほどよりも険しい顔になっていた…
自分がデスノートの所有権を持つのか…　他の者にゆずり、リスクを避けるか……
様々な思考をめぐらせ…　和山署長はその固い口を開かせた…
「…　それならば…　茅ヶ崎君…　君が触りたまえ…」
和山署長はリスクを避けるという選択を選んだ。…　あくまで合理的な考えなのだろう。
和山署長に先ほどまでの軽率した声色は消えていた。

しかし、茅ヶ崎は和山署長の答えを聞き、なにやら笑い始めた。
「ククッ…　保身に必死ですか……　署長…　分かりました…　俺がこのノートの所有権を持つことにします…」
茅ヶ崎は机の上に置いてあるノートを手に取り…　周りを見渡し始めた…
そして、ふと何かに目を止めた…　もちろん我々には見えていないが…　おそらく茅ヶ崎には見えているのだろう……　死神が…
茅ヶ崎は目線を下に落とし…　そして上に、目線を上げた…
「お前、どっかで見たことあるぞ…　たしか名前は…　ベポ…　だったな?」
そう言うと、茅ヶ崎はしばらく凝視したのち、急に笑いだし「ククッ…　お前かぁ…」と言い出した。
「…　な…　何が起きているのかね?…　茅ヶ崎君…」
訳がわからない和山署長は恐る恐る聞いた…
すると、茅ヶ崎は手に持ったデスノートを机の上におき、そのノートを指差した。
「…　ノートに触れば分かりますよ」
茅ヶ崎がそう言うと、和山署長は机に置かれたデスノートを持ち…　目線を茅ヶ崎が向く方へと移した……　その瞬間、
「……　っ!!!」

和山署長はまるでバケモノでも見たかのような顔をし、そのまま手に持ったデスノートを床に落とした。

…　パサッという軽い音が響き渡る。

「ダメじゃないですかぁ署長…　大切なノートなのに…」

茅ヶ崎はそう言うと、デスノートを拾い上げ私の前に差し出した。

「ホラ…　触ってみろ…　赤城…」

私は恐る恐るデスノートに触れる。

「……」

私は何も言わずデスノートを受け取った。

体に感じるものは何もなく、ただのノートのようだった。

私はゆっくりと辺りを見渡し、変化がないか確かめた……　次の瞬間、私の人生は大きく揺り動かされることとなる。

「…　っあ…　!!!」

私はその姿に圧倒され、目を見張った…

始めてみる死神は、

仮面のような金色の顔で…　六本もの指があり、驚くほど大きな身体をしていた。…

その大きさはこの部屋の天井に頭がつくほどであった…

死神…　私のなかではそんなのは神話の中だけの存在だと思っていた。

私の中の常識が根こそぎ覆され…　身体が棒のように固まってしまった。

ーそんな……　冗談じゃないぞ…　ー

今さらになってデスノートの本当の恐ろしさを知ったのだと、私は思った。

そして…　その死神はゆっくりと…　口を開き始めた……

第五章

第五章［死神ベポ　Ｐａｒｔ３］

「我が名は…　死神ベポだ…」
静まりかえった部屋でベポはそう言った。
デスノート保管室内は張りつめた空気で覆われていた。
我々は死神を初めて目にしたことにより…　その恐怖のあまり、呆然と立ち尽くす他無かった…
ただ一人を除いては…
「ベポ…　このノートの所有権は今、誰にある?」
何のためらいもなくそう言ったのは茅ヶ崎であった。
ベポはそれを聞くと、

「前の所有権を持っていた阪本　阿久比（さかもと　あぐい）はもう死んでいる。…　今、所有権を持っているのは…　お前だ…」

と茅ヶ崎を指差しながらそう答えた。

阪本　阿久比…　今回の大量殺人事件の犯人であり、このデスノートの所有権を持っていた者だ…

茅ヶ崎は笑みを浮かべながら次の質問に話を移した。

「それじゃ…　この世界に存在するデスノートは何冊だ？」

ベポは六本の指を広げこう答えた。

「…　六冊だ」

ベポがそう答えた瞬間、我々は絶望に陥った。

「…　こんな…　こんなに恐ろしいものが…　世界に…　六冊…？」

私は目の前が…　真っ黒になった…

ー…　ただでさえ一冊でもう限界なのに…　これがあと五冊もあるなんて…　ー

茅ヶ崎はなおも態度を変えずしゃべり続けた。

「ちなみに他のノートの場所がどこにあるのかを死神が所有権を持つものに教える事はアリなのか？」

茅ヶ崎がそう聞くと、ベポは「…　それは…　例え所有権を持とうが持たまいが関係

なく、無理な話だ」と冷たく言った。
茅ヶ崎は不満そうな態度をとると、ノートを開きペラペラとなんページかめくった後、何枚か破り始めた。
それを見たベポは、「そんな事をしても･･･ なんの意味もないぞ･･･」と見下すように言った。
私は不思議に思い、ベポに質問した
「意味がない･･･ ということは、デスノートはページが減らない･ ということか?･」
ベポはそれを聞くと、吐き捨てるかのように、
「そういうことだ」
と答え･･･ それに続き、
「･･･ まだ何かあるか?･･ 小僧･･」
と私から茅ヶ崎に目を移し言った。
茅ヶ崎はベポの言葉が気に食わなかったのか･･･ 胸ポケットから拳銃を取り出しそのままま っすぐと銃口をベポの頭に合わせた。
「･･ なっ!･何をする気かね!?･茅ヶ崎君!!･」
署長は茅ヶ崎の行動を遮ろうとしたが･･･ 当然間に合う訳がなかった･･･

ドオン!!!　ドオン!!!　ドオン!!!　ドオン!!!
頭…　胸…　右手…　左足…
と一つ一つずらすかのように、茅ヶ崎は発砲した。
銃から勢いよく飛び出した弾はそのままベポの体を貫き…　いや、体を通り抜け…
そのまま保管室の壁にめり込んだ。
茅ヶ崎はさも分かっていたかのような顔で話し出す。
「やっぱり…　死神は殺せないんだな?」
そう言うと、ベポは少し考えた後…　ゆっくりと話し出した…
「我々を人間が殺すことはできない。…　しかし、
死神を殺す方法ならある」
と、間をあけながら答えた。
茅ヶ崎は表情を変えずに「どんな方法だ?」と聞くが、
「それを答えることはできない」
と、言うと…　続けざまに
「…　もう私が話すことはない…」
と告げ、ベポはそのまま姿を消した…

私と茅ヶ崎は、ベポが消えるとデスノートを保護ケースに入れ部屋の中央に備え付けてある保管庫にそのケースを納めた…
保管庫のロックを解除する方法は指紋認証といたって簡単だが、入れるのは本部の者のみとなっており、ノートを無断で持ち出すとアラームが鳴るようになっている。

私は、死神を見て硬直してしまった署長の気を戻し…　署長室へと移動した。
(茅ヶ崎は先に戻ると言い保管室を後にした)
無事署長を運び終えた後、
私は署長室から本部に戻るまでの通路で、ふと疑問に思った。
ーなぜ茅ヶ崎はあんなに冷静な態度で死神と話をすることができていたんだ?…
それに死神をみただけでその死神の名を口にしていた。…　もしかすると…　茅ヶ崎は前に死神に会ったことがあるのでは?ー
…　そう私は思ったが「考え過ぎだ…」と言い、流すことにした。

本部につくなり上の部署から帰宅指示が出され我々は帰ることとなった。
登は茅ヶ崎にあうとすぐに「久しぶりに飲みに行きましょうよ!」と言っていた。
七飯は本部の書類やらデータやらを他の部署に返しに行っていた。

その途中のことだった、
七飯はデスノート保管室のことが気になっていた。
一体デスノートとはどのようなものなんだろうと…
一応自分も本部の一員なんだしちょっと見るだけなら大丈夫だろう、と七飯は思い、行く足をデスノート保管室へと切り替えた。
幸いデスノート保管室に鍵はかかっていなかった。見張りもいないようなので七飯はすんなりと入ることができた。
保管庫のロックを解除しケースを取り出す… 胸が張り裂けそうなほど緊張していた…
鼓動が早くなるのを感じる…
震える手で… ゆっくりとケースを開ける… そして… デスノートに触れた

その時だった…

「… ぐぅ!!!!」
様々な記憶が七飯の頭に流れ込んだ…
七飯は頭を抱えながら… しゃがみこむ…

すべてを…　思い出した…
七飯は立ち上がり…　後ろを振り返った…
「久しぶりね…　ベポ…」
七飯はそう言うと誰もいない部屋で…　死神と、話始めた……

真夜中１１時過ぎ…
茅ヶ崎は久しぶりに酔いを感じていた…
「まさか、登があんなに飲めるなんて…」
茅ヶ崎と登は二人で居酒屋に行っていた。
ビールやら焼酎やらを飲み、話に花を咲かせ…　始めはとても楽しかった。
しかし…　飲めば飲むほど登の酒癖は悪くなり、結果焼酎を大量に飲むはめになった。
そんなこんなで登のもとから離れる事に成功した茅ヶ崎は一刻も早く帰って寝たいと思いながら一人夜道を歩くのであった。

家に帰った茅ヶ崎は玄関で靴を脱ぎ、懐かしの居間へと入った。

居間に入った茅ヶ崎は一瞬のうちにして酔いが覚めることとなる・・・・

「よう・・・　茅ヶ崎・・・」

細長い腕に縦長い髪をした・・　その死神は茅ヶ崎を見るなりそう言った。

「リューク・・・」

茅ヶ崎は睨み付けるようにリュークを見た。

しかし、肝心なのはリュークがここにいることではない・・・

茅ヶ崎はテーブルの方に目線を移した・・・

そこには一年前一緒に海外に調査しにいき忽然と姿を消した・・・・　Ｌの姿があった・・・

茅ヶ崎は震える拳を握りしめた・・・・

ーこいつは・・・・　半年間・・・　一体何をしていた・・・　？ー

新たな物語の歯車が・・・・　軋む音を響かせながら・・・　回り始めた・・・

第六章

第六章［ｏｎｅ　ｙｅａｒ　ａｇｏ］

赤城達の身に突如として降りかかった大量殺人事件…

その一年前…

Ｌは大きなビルの一室に住んでいた。

部屋の中はとてもスッキリとしていて、テレビや机、椅子、カーペット等が部屋に備え付けられており、余分な物はなく、きれい好きにはたまらないであろう部屋となっていた。

Ｌは一人机の上におかれたマスカットを食べていた。

マスカットは皮まで食べられるし、種の入ってないものを選んでいるため、とても食べやすかった。

口にいれたとたんその果肉の弾力と柔らかさがちょうど良い具合に合い、とても美味

しいので、どんなに食べても飽きがこない。

そんな美味しいマスカットを食べながら…　Ｌは考えていた…

そろそろ行動を起こすときではないかと…

ー…　約十九年前のあの事件から今に至るまで、日本でのデスノートによる活動が乏しくなっています…　このままでは、デスノートの力を何も知らずに丸腰で戦うはめになるかもしれませんね…　それはなんとしてでも避けなくては…　ー

Ｌは机の上に置かれたメモ用紙をみた…

今となってはもう何も思い出せないが、約十九年前に行われた大量殺人事件が起こるまで…　Ｌは元々デスノートを所持し、その所有権を持っていた。

…　しかし、デスノートを所持した状態で日本に行くのはあまりにもリスクが高すぎると思い、必要な事はメモ用紙に書き残し、その所有権を放棄したのである。そして、ノートの所有権を放棄した者は、デスノートに関する記憶を消されるというルールにより、Ｌはデスノートに関する記憶ををきれいさっぱり消されたのであった。

ちなみにだが、メモ用紙に書いた事は以下の通りである。

・大量殺人が起こった約何年後か何十年後…　とにかく日本の警察署にあるデスノー

ト対策本部に入り、その身が落ち着いた時、ボストンの中心街にある路地の裏に隠されたデスノートを見つけ出し死神と再会する。

・事件の起こった関東地方では、必ずデスノートを所持している者が数名いる。

・日本にいる間、デスノート対策本部に所属し、デスノートの関与している全ての事件を調べ上げる。

以上…　このように書いたメモ用紙をLは残していた。…　今となってはL自身何のためにこれを書いたのかさっぱりであった。

ー…　このメモにかかれたことをしなければならないとなると…　私はこれからアメリカに行かなければなりませんね……　ー

デスノートを放棄した後、元々日本に住んではいなかったにもかかわらず、事件後日本についたLはいとも簡単に警察署に就職し…　今となっては出世もできるような位置にまで登りつめていた……

ーこのままアメリカのボストンに行くのも悪くないですが、…　一人で行くとなると、本部の人や他の部署の方に怪しまれるかもしれませんし…　どうしましょうか……

？ー

Lはそう思うと、ある事を思いついた。

ー：　そうだ…　本部から一人連れていきましょう…　そうすれば、なんとか事情を話せばどこへでも行けますし、何より誰も不審には思わずに私がアメリカに行くことを許可するでしょう…

そして、アメリカについてしばらくたったらデスノートとやらをとりに消えれば良いことですし…　消えた理由は…　そうですね…「親戚が亡くなった」とか言っとけばなんとかなるでしょう……　ふふ…」

Lはにんまりと口の端を上げ…　誰をアメリカのボストンに連れていくか考え始めた。

ー…　適当にアミダやクジなどは理想的ではないですね…　一人一人の人格や個性等を考えた上で出さなければ…　ふむ…　とりあえず、選択内に女の方は入れないでおきましょう。…　何をするか行動がよみにくいですし…　何より力がないとなると、危険な町で何をされるかわかりませんしね…　女の方はパスする方向でいきましょう。……となると…　結果男の方の中から選ぶこととなりますね……」

Lはマスカットを一つつかみ口の中に入れる。

そして、本部に所属する男の顔を一人一人頭に浮かべながらメモ用紙に一人ずつ名前

を書いていった。

…　そして…　誰が一緒に行くのに適任か考え始めた。

ーまずは、余市　登君ですね。…　彼の頭はあまり良くはないですが、マイペースな面を持っていて、急な状況変化に強いという特徴があります。…　しかし、力がなさそうなんですよねぇ…　高校のテニスで地方大会まで勝ち進んだという経験がありますが…まだまだな所があるんですよね…　とりあえず無しとしましょうか。ー

Ｌはメモ用紙の「余市　登」の欄に一本の線を入れて上書きをする。

ー…　次は、米沢　呉君ですか…　彼はかなり頭の良い大学からこの部署に入りましたし…　大学の試験などはいつもトップに入るような人だと聞きました…　まぁ力はなさそうなのですが、頭のよさではかなりの腕が立つと予想されますね…　ここは保留という形にしておきますか…　ー

Ｌはメモ用紙に書かれた「米沢　呉」の欄の横に「保留」と書いた。

ー…　お次は…　赤城　関君ですね…　この方はとてもリーダー性があり、署内で行われた体力検査の時では上位の方に軽々と入るような相当の強者です…　とても役にたつとは思いますが、その頭のよさというか…　勘のよさというか…　それによって私の考えがよまれてしまわないでしょうか？。…　バカで能天気な登君のような人だったらなお良かったのに…。悔しいですが…　後々必要になってくる可能性があるかも

しれないので…　ここは温めて温存させておきましょう。ー

Lは「赤城　関」の欄に線を引いた。

ーさて…　いよいよ次で最後です…　が…　私この人は一番合ってない気がするんですよねぇ…　ー

マスカットを一つつかみながら…　Lは茅ヶ崎　神島の欄を見る。

ー茅ヶ崎　神島…　部署内で行われた試験で軽々とトップをおさめ…　その他全てにおいて上位に入る超人的存在ですね…　欠点を見つけるにもありそうに無いですし…　ー

Lはため息をつき落胆した顔をしたが…　ふと、あることを思った。

ー…　逆にこの力を利用するのはどうでしょうか?…　あえて頭の越えた人を連れていくことで、より私の行動の役に立つかもしれませんしね…　もし、一緒にいるときに怪しまれたりした場合、共犯にしてしまえばへたに本部の方には言わないでしょう…　なるべく内密に動けば上手くいくはずです…　ー

そう思ったLは「茅ヶ崎　神島」の欄をぐるぐるとペンで囲みを書いた。

そしてポケットから携帯を取りだし…　茅ヶ崎に電話をかけ始めた…

第七章

第七章［嘘］

デスノート対策本部…　その一室で、茅ヶ崎　神島は頭を抱えていた。

「…　殺人記録におかしな点などもとからなかったのかもしれない…　俺は一体何のために記録書を見てるんだ？」

デスノートによる事件が裏に隠されていないか…　茅ヶ崎は一人で、今までに起こった大量の殺人記録をみていた。

しかし、どれもただの殺しで、デスノートが関わっていると考えられるものは何一つとしてなかった…

「これじゃ…　やるだけ無駄なのかもな…」

三日間つきっきりで書類に目を通し…　それでもなんの成果も得られない茅ヶ崎は、冷めきったコーヒーを飲みながらため息をつくのであった。

…　もう今日は帰ろう…　そう思った時、
机の上に置かれた携帯が鳴り始めた……
「…　？」
茅ヶ崎はコーヒーをデスクの上におき携帯を取る…
「もしもし…」
茅ヶ崎の身体はとうの昔に限界を迎えており、その疲労は声にはっきりと現れていた。
しかし、Ｌはそんな事にはかまわず話し出す…
「茅ヶ崎君…　これから私と一緒にアメリカにいきましょう…」
「…　は？」
茅ヶ崎は気の抜けた声で言う…
Ｌはもう一度繰り返し言った。
「アメリカにいきましょう…　日本は平和すぎてデスノートどころではありません…」
茅ヶ崎はＬの言葉を聞き、こんがらがる頭を落ち着かせた、
ー…　アメリカ？…　一体Ｌは何が言いたいんだ？…　と、、とりあえず訳を聞こ

う…　ー

「少し何を言っているのかが分からないな…　なぜそこまでアメリカにいきたがる?」

茅ヶ崎が険のある声で聞くと、Ｌはまるで「その言葉がくるのは予測していた」と言わんばかりにすらすらと説明し出した…

「アメリカで有力な情報が隠されていると知り合いから聞き、少し探ってみたところ…今現在、アメリカで極秘に行われているプロジェクトがあることが判明しました。…中でも、そのプロジェクトの中枢に立つグループの中にはデスノートの所有権を持っている者がいるらしく、アメリカで不審な死亡事件が次々と起きてるそうなんです…」

無論、Ｌの言葉は嘘である。

しかし、茅ヶ崎はようやく進展があったと思い、

「分かった。それなら明日朝８時に羽田空港で…　調査届けは俺が上に出しておく…それでいいな?」

と答えた。…　しかし、Ｌはそれを聞くと困ったような声色で否定し始めた。

「それがですね…　よく聞いてください…　これは私がたまたま知り得た情報で嘘か本当かもわからないくらい曖昧な情報なのですが…　その極秘グループは日本や中国、韓国…　その他アジアの国々全ての警察の情報を握っているそうなのです…」

茅ヶ崎は疲労でLが言っている言葉が怪しいとは思えなかった。ただアメリカが恐ろしい力を持っていることが、今の茅ヶ崎にとって真っ先に頭に入ってきた。

「ま…　まさか…　そこまでアメリカが技術を進めていたなんて…　それじゃ、もし調査などで我々がどこかに行くとなると…　それも全て…」

「はい、アメリカのグループに届きます。…　それだけじゃありません。…　もし、その警察官が捜査等の理由でアメリカに入ってきた場合…　その者はスパイと見なされ消されるそうなのです。…　証拠として約十日前、中国の警察署がアメリカを調査しに１０人の警察官を派遣しました。…　その結果、１０名の内７人がアメリカで行方不明となり、残り３人も帰りの便の飛行機が空爆し死亡したと聞きました。…　この事はあまりに重大で危険なため政府が公には発表しないと決めたそうなのですが…」

茅ヶ崎は額に汗を浮かべていた。

…　デスノートの情報を知られないために…　捜査に来た警察官を皆殺し…　そう考えたとたん…　茅ヶ崎の背筋が凍りついた。

分かりきったことだが、Lが言っていることは全てでっち上げられた嘘である。

そんなことも考えなかった茅ヶ崎はあることを提案した。

「それなら、休暇届を本部に出す。…　そうすれば本部のデータに調査目的とは書かれないだろう…　休暇理由は他県の警察署の研修のためなどで話は通るはずだ…」

Lは口の端を上げにんまりとした笑みを浮かべた。
「それが良いですね・・・　では明日朝8時に羽田空港ということで。・・・　ちゃんと休暇届出しといてくださいよ?」
「分かっている・・・　くれぐれもこの事は他言しないようにしろよ・・・」
茅ヶ崎はそう言うと電話を切り、急いで家へと向かった。

ー・・・　これでアメリカに行く準備はできましたね・・・　ー
Lはマスカットの味を堪能しながらアメリカについた後どのような行動をとるか考えるのであった。

同時刻

死神界にいたリュークはリンゴを食べていた。
「やっぱ死神界のリンゴは不味すぎるぜ・・・　こんなのただの砂の固まりじゃねぇか!!」
死神界のリンゴを食べて腹をたてていたリュークをみて他の死神は笑い出した。
「またそんなの食ってんのか?リューク」

「救いようのない馬鹿だな!!ギャハハハハ!!」
リュークは他の死神にバカにされ、さらに腹を立てる。
「テメェら!!見せ物なんかじゃねぇんだぞ!!!・・・ ったく!!嫌になるぜ!!!」
Lが所有権を放棄してから約19年間死神界にいたリュークは、そろそろ新しい者を探そうかと思っていた。
「はぁ・・・ Lの奴いつノートの場所まで来るんだ?・・・ 一応、人間界に行ってみるか?」
リュークはそう言うと人間界に飛び立とうとした。
「おいリューク!!またどっか行くのか!?」
死神にそう言われたがリュークは無視し、そのまま飛び立った。
ー早く人間の食べるうまいリンゴが食いてぇぜ・・・ ー
禁断症状が出始める身体をどうにか整えながら、リュークはアメリカへと向かったのであった。

第八章

第八章［ボストン］
次の日の朝
時刻は午前８時半をやや過ぎた頃・・・・
茅ヶ崎は羽田空港にて、Ｌの到着を待っていた。
ー・・・・　遅いな・・ー
空港のロビーの時計の針を見ながらため息をつく。自身の腕時計も何度か確認するが、針はちゃんと８時半過ぎをさしていた。
いっそ電話でもかけるか、と思った時、後ろからか細い声が茅ヶ崎の耳に入り込む。
「・・・　おはようございます・・・・　茅ヶ崎君・・・」
まるで病人のようなＬの声は、異様な空気を漂わせていた。
サイズの少し大きい長袖のＴシャツにおそらくブランドものであろうジーンズをし、背中を少し丸めながら立っているＬの姿は、よりその異様さを一層と引き立てていた。
「やっとか・・・　Ｌ、一体どこでなにをしてた・・・　？」

茅ヶ崎はLの姿に驚きもせずに話し出す。
「少し用事を済ませていただけです…　なんの問題もありませんよ…」
Lはそう言った。…　が、茅ヶ崎はその言葉に納得しかねた様子で反論する。
「あのなぁL、いま何時だと思ってる…？フライトの予定時刻は8時にしているのに…　今はもう8時半過ぎだぞ…　はぁ…　こんな状況でどうやってアメリカまでいくんだ!?」
急な休暇届をだし、さらにはフライトの予定まで立てることになった茅ヶ崎は、睡眠不足によりかなりの疲れが溜まっていた。
「まぁそう声を荒げないでください。……　少し時間をオーバーしたことには謝ります。…　しかし、私は別に「フライトの手続きを済ませておけ」とは言ってませんでしたよ?」
Lはポケットからチョコバーを取り出しつつもそう言う。
「はあ?…　じゃどうやってアメリカまでいくんだよ?」
茅ヶ崎の言葉を聞き、Lはチョコバーをかじりながら答える。
「あぁ…　言ってませんでしたか?……　私の家にはプライベートジェットが何機かあるので、呼びさえすれば何処へでも行けるんですよ。…　というわけなので、昨日のうちに私の…　なんというんですかね?…　右腕?…　まあそんな感じの者である「ワタリ」

にジェット機をよこすように頼んでますから…　今日はそれに乗っていくとしましょう…」

Lの言葉に一瞬ついていけないようなそぶりをどうにか誤魔化しながら、

「そ、そういうことは……　先に言えよな…」

と、茅ヶ崎は言った。

その後、搭乗手続きをしている中…　茅ヶ崎の頭の中ではさまざまな疑問が浮かび上がっていた。

ー…　なぜ、Lは俺と一緒にアメリカに行くことにしたんだ？…　Lの言う例の組織にばれたくないのなら、こんなプライベートジェットなんかより、一般に出回っている飛行機の方が行きやすいし、身元が分かりずらくなるはず…　何より単独行動の方が捜査しやすいはずだ……　何か別のことで協力してもらうために、俺はここにいるのか？…　まさか……　Lは何かを隠している…？ー

茅ヶ崎はロビーからジェット機に向かうLを見つめる。

ー…　一体、Lは何を考えているんだ…　ー

さまざまな思考を巡らせていた、その時だった。

「すみません…」

ふいに後ろから声がかかり、茅ヶ崎は振り返る。
少し老いたその声の主は、大分年を取っているかのような顔つきで、白髪でメガネをかけていた。
服装は黒のスーツに黒いネクタイをつけていて、文句ひとつない格好だった。
「あなたが茅ヶ崎様ですね…　話はLから聞いております…　どうぞ、私のことは「ワタリ」とお呼びください…」
そうワタリから言われ、茅ヶ崎は軽く頷くと、ジェット機の中へと入っていった。

Lの持つプライベートジェットの内装は、小型テレビや光輝くテーブル、高級感を存分に放つソファーなど、まるでファーストクラス並み…　いや、それをはるかに越える設備が整っていた。
…　そんな豪華なジェット機に乗り、L達は約12時間程度空の上にいた。（その間、茅ヶ崎は力尽き果てたかのように熟睡していた）
そして、なんの問題もなくボストンにたどり着き、一行は荷物を下ろした。
ホテルを取ってあるというLの言葉を聞きボストンの中心街までいくことになったのだが、その交通手段も一風変わっていた。
茅ヶ崎は今までにアメリカには何度か行った事があり、安っぽいタクシー等を利用し

ホテルまで行っていた。
だが、今回は安っぽい車などではなく、都会でまれに見かけるような黒く輝くリムジンに乗り、ホテルへとむかったのであった。
ボストンの町並みはとてもキラキラと輝いていて、数々のホテルやカジノ、映画館が建ち並んでいた。ネオンで彩られた多くの看板は夢のような感覚を味あわせる。
そしてリムジンはホテルの前で止まり、茅ヶ崎達はホテルの入口の奥へと進むのであった。

ホテルの中はやはり豪華な設備が整っており、息をのむほどの輝きを放っていた。
「‥‥ 本当にここで寝泊まりするのか?‥‥」
ロビーで口を開け立っている茅ヶ崎にホテルの使用人と話を終えたらしいワタリが、笑顔で茅ヶ崎に答える。
「そうでございます。‥‥ このホテルは、この町の中でもそこそこの評判を持つホテルだと顔見知りから聞き、少し調べましたところ、‥ まだ建てて間もないのにもかかわらず、かなりのお客様がご利用になったそうで‥‥ このようなホテルの密集している町には大変珍しいケースだと思いまして、私の方でご予約させていただきました。」
茅ヶ崎はワタリの言葉に耳を傾け、ホテルに対して感嘆の声を漏らしていたが、Lは

全く興味がないといった様子で、エレベーターを使い先に部屋へと行ってしまった。
「それではごゆっくりお部屋の方でおくつろぎください。‥‥ あ、そうそう‥ コートはこちらでお預かりいたしますので‥‥」
そう言われ、茅ヶ崎は着ていたコートを脱ぎ、ワタリにわたす。
‥‥ コートを手に取ったワタリは、
「‥‥ はい、ありがとうございます‥」
と言い、そのままどこかへ去っていった。

その後、エレベーターを使い、赤いカーペットの上をしばらく歩き、茅ヶ崎は部屋へと着いた。
当然Lはなかにいて、一人でバナナを食べていた。
高そうな椅子に体操座りでいるLを見ながら茅ヶ崎は話始めた。
「‥‥ それじゃ、本題に入るか‥‥ L‥」
茅ヶ崎の言葉に、Lはコクリと頷く。
「‥‥ そうですね。‥‥ 睡眠は十分とれているようですし‥‥ 分かりました。‥‥ それでは、今回の目的を‥‥ 確認しましょうか」
Lはバナナを食べながらそう言った。

物音一つしない静かな空間に、Ｌの細い声が伝わる。
それと同時に・・・　Ｌは口を少しにやけさせたのだが、
それを茅ヶ崎が気づく事はなかった。